

○指宿美純\* 田中辰明\*\*

(\*お茶女大・院, \*\*お茶女大)

目的：旧来、我が国においては夏を旨とする住宅が建築され、その住文化に基づいた住意識、生活様式が発達してきた。しかし近年では省エネルギーや快適性の面からも住宅は、欧米のように高气密・高断熱化してきている。生活様式の違いから様々な問題が起こっていると考えられるため、居住者の住まいや住まい方に対する意識やライフスタイルの実態を探り、問題点を明らかにするところを目的とした。

方法：一般に、その断熱仕様や工法から高气密・高断熱住宅といわれる輸入住宅の居住者を本調査の対象とした。居住者のいる輸入住宅3棟において夏期・冬期それぞれ一週間、リビングの温度・湿度などの測定を実施した。並行して窓の開閉、冷暖房機器、発熱機器の使用状況、室滞在状況を細かく生活パターン表に記入してもらい、実測値から計算された快適性の評価と合わせて比較した。また、輸入住宅居住者において年代別のグループを作り討論形式でインタビューを行い、輸入住宅内での日常生活における満足点や不満点、高气密・高断熱の住宅で発生する問題について討論を行った。

結果：生活パターン表と実測値から計算された快適性の評価から、冷暖房の設定温度の工夫や換気方法において改善されるべき点が明らかになった。グループインタビューからは、必ずしも居住者が住宅の高断熱・高气密の性能を正しく理解し、性能を引き出すようなライフスタイルを身に付けているとはいえないことが明らかになった。住宅性能の向上に伴い、居住者は意識とライフスタイルを変化させるべきである。そのためにはより熱心な住教育、消費者教育と同様に住宅供給側の指導・教育も重要になると考える。